2023 年 7 月 21 日

ギジェルモ・ウィルデ氏招へい報告

武田和久（政治経済学部准教授）

この度、2023 年度研究交流支援制度の採択を受けて、アルゼンチン国立科学技術研究評議会（CONICET）の専属研究員で同国の国立サン・マルティン大学教授であるギジェルモ・ウィルデ（Guillermo Wilde）氏を 2023 年 5 月 31 日から 6 月 19 日にかけて明治大学に招へいした。同氏の専門は歴史人類学であり、氏は植民地期南米においてキリスト教が先住民に及ぼした社会文化的影響（とりわけイエズス会宣教師の布教活動が先住民グアラニに与えた諸影響）を、一次史料の丹念な渉猟を通じて多くの研究成果を公にしてきた。氏の主要業績は 2009 年出版の単著で Latin American Studies Association のイベロアメリカ賞を受賞した *Religión y poder*、また編著の *Saberes de la conversión* である[1]。

招へい期間中、ウィルデ氏は二つの講演を行い、双方とも 2023 年 6 月 3-4 日に明治大学駿河台キャンパスで開催された日本ラテンアメリカ学会第 44 回定期大会において記念講演とパネル D への登壇というかたちで実施された。

最初の記念講演のタイトルは“Historia global, historia del conocimiento, historia del cuerpo. Una mirada desde las fronteras coloniales de América del Sur”というもので、来場者は 50 名程度だった。講演ではまず導入として「フロンティア」に対する従来のイメージや近年の「フロンティア研究」の動向が整理された。従来フロンティアは無秩序で先駆的開拓者が活躍する線的空間、また国民国家や帝国がそうした無秩序的空間ならびに同空間で暮らす土着の人々を平定・管理していく様相が論じられてきた。だが近年、フロンティアとはむしろ関係当事者が交わる仲介的空間であり、国民国家や帝国に従属しない人々が暮らす空間、「他者」なる存在を取り込む空間、自立的生き方を可能にさせる空間と指摘される傾向にある。フロンティアでは「絶え間のない交渉」が当事者同士で繰り返され、そこでは「支配する者とされる者」というよりも「非対称性」が際立つことになる。本講演では近年のフロンティア研究によるこうした指摘が植民地期南米でも顕著に見られることが指摘され、その具体的様相がグローバル・ヒストリー、知の歴史、身体の歴史から説明された。

「フロンティア」なる前人未踏の地に積極的に足を踏み入れたのは他でもなくキリ

---

[1] それぞれの書誌情報は次の通り。Guillermo Wilde, *Religión y poder en las misiones de guaraníes*, Buenos Aires: Sb, 2009; Guillermo Wilde (ed.), *Saberes de la conversión: jesuitas, indígenas e imperios coloniales en las fronteras de la cristiandad*, Buenos Aires: Sb, 2011. 2009 年出版の単著は 2016 年に第 2 版が刊行され、この第 2 版には 2016 年までに出版された研究成果を解説した序論と詳細な巻末索引が加えられた。ウィルデ氏の研究について日本語で読めるものとしては、2009 年出版の単著の書評が存在する。武田和久「書評：Guillermo Wilde, *Religión y poder en las misiones de guaraníes*」『ラテンアメリカ・カリブ研究』第 18 号、2011 年、56-61 頁（https://lacsweb.files.wordpress.com/2013/04/18takeda.pdf）。また齋藤晃編『宣教と適応―グローバル・ミッションの近世―』名古屋大学出版会、2020 年出版の第 1 章には「本質的なるものと中立的なるものの間で―南米植民地の辺境地域における宣教師の知識と適応―」というウィルデ氏の論文の日本語訳が出ている。

スト教宣教師であり、とりわけイエズス会士は植民地期南米で大規模かつ広範囲にわたって活動した。活動の最中、彼らの一部は命を落としたが、そうした者たちは程なくして「殉教者」と認定され、その活動や思想は各種印刷物や図版、伝聞や聖史劇などを通して世界に広く拡散・循環していく。こうして殉教者の足跡は「知識」として、彼らの活動の舞台となった土地の動植物相や現地住民の風俗や習慣にまつわる情報と相まって同じく地球規模で拡散・循環していったのである。

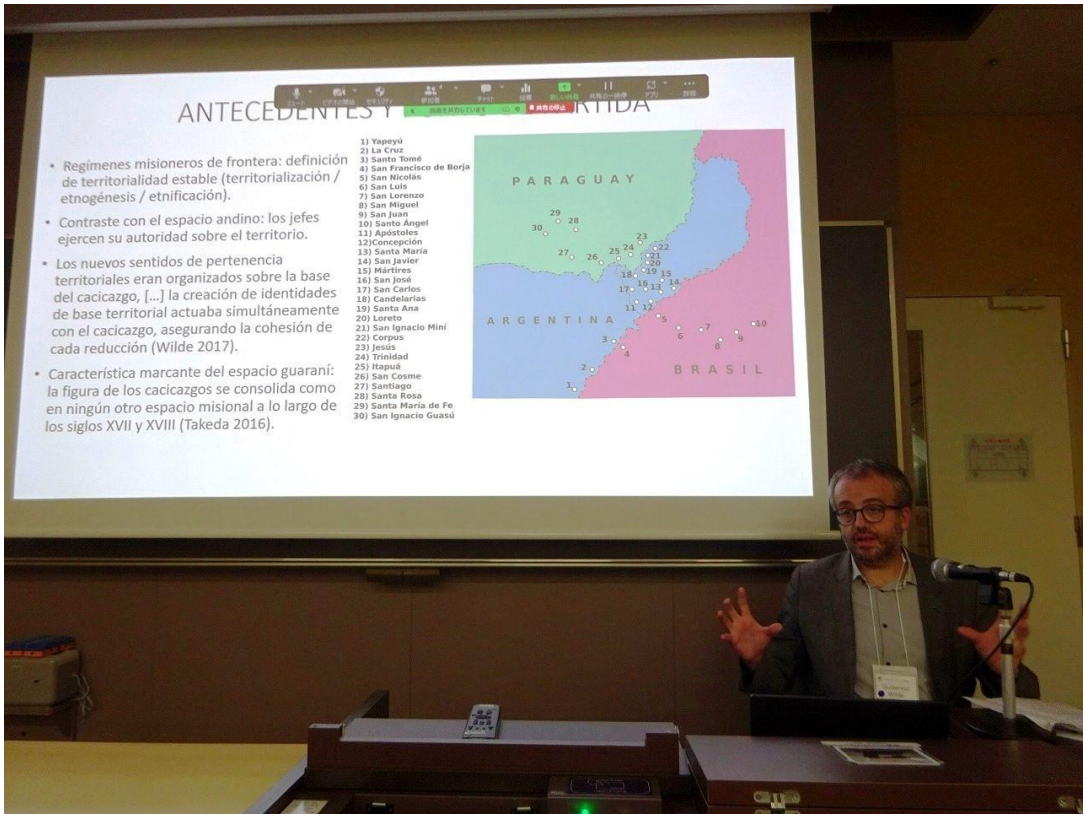
そして最後に、宣教師たちがフロンティアで行った活動そのものが、近年のフロンティア研究の指摘と興味深くも一致する。すなわち宣教師の活動には、南米大陸の土着の人々を一元管理し、彼らが理想とする人間像にそうした人々を還元しようとする（reducir）特徴が本質的に内在していた。そのため時と場合により土着の人々の身体に強制力が行使されたり精神的恐怖が植えつけられたりしたこともあったが、しかしその一方で宣教師たちは、土着の人々が古来より受け継いできた伝統や慣習を取り込んだり温存したり活用したりもしていた。この意味で彼ら宣教師たちが土着の人々を理想的人間に還元しようとした場、すなわちレドゥクシオン（reducción）とは「混成的な統治制度」（regímenes híbridos）にも等しく、そうした制度がとりもなおさず、植民地期南米のフロンティアという空間で成立したのである。

次いでパネル D における Wilde 氏の講演タイトルは“Cartografía y censos poblacionales en las fronteras de América del Sur: fuentes complementarias para el estudio de la territorialidad de las misiones jesuíticas”というものであり、参加者は 10 名程度だった。本講演では 17-18 世紀のラプラタ地域におよそ 160 年にわたり存続した先住民改宗施設（日本語では布教区と訳出。スペイン語では misión もしくは reducción）のうち、イエズス会士が管理・運営したヘススならびにロレート布教区にまつわる地図を住民名簿と比較分析したことで明らかになった結果が報告された。いずれの地図にも先住民グアラニの首長の氏名が記されており、住民名簿を元にこうした氏名を経年的に辿ったことで、当該首長の名字をそのまま名称とするカシカスゴ（cacicazgo、首長の権力基盤や支配領域）を 100 年以上にわたり同定できた。このことは、布教区を支える下部組織としてカシカスゴがイエズス会士により温存されていたことを示している。事実カシカスゴは、農作業に必要な家畜の分配、土地の領域確定、ミサをはじめ各種宗教行事の際にグアラニを規律化させる重要な役割を果たしていた。

二つの講演のテーマは日本ではまだ馴染みが薄く、相当に専門的かつ高度な内容だったが、ラテンアメリカ研究に従事する来場者の反応には目を見張るものがあり、特にパネル D のコメンテーターを務めた大越翼氏（京都外国語大学教授）からは、メキシコとラプラタ地域の比較研究を立案していこうという話が出てきた。なお前者の記念講演は 2024 年刊行の『ラテンアメリカ研究年報』に掲載予定である。

ウィルデ氏とは招へい期間中に幾度となく話をする機会に恵まれ、新型コロナウイルスの感染拡大以前より話し合われていた共著執筆の段取りや手順、武田が現在取り組んでいる共同研究へのウィルデ氏の参画についても十分に時間をとって話ができた。こうした交流を可能にしてくれた本支援制度の関係諸氏にはこの場を借りて厚く御礼申し上げたい。

2023 年 6 月 3 日に実施された記念講演の様子



2023 年 6 月 4 日に実施されたパネル D の様子